

京都橘大学女性歴史文化研究所第二四回シンポジウム
「近代と働く女性たち」Ⅲ

討 論

【南】 それではパネルディスカッションに移ります。まずパネリストの方をご紹介します。まず、同志社大学大学院社会学研究科教授の佐伯順子先生、京都橘大学文学部教授の松浦京子先生、そして本日のコーディネーターで、京都橘大学女性歴史文化研究所長の南です。よろしく願います。

まず、ご質問をいただいています。佐伯先生へのご質問について、コメントをお願いできればと思います。

【佐伯】 みなさま、ご質問をありがとうございます。「きょう紹介された新聞記事には男性の視点が入っているのではないか。働く女性の真の姿や思いが出ているのか。書き手はどういう人だったのか」という、たいへん鋭いご質問をいただきました。

きょうは十分にご紹介できなかったのですが、実は明治の新しい女性職として女性の新聞記者もかなり注目されていて、『読賣新聞』の女性記者募集の記事では、「既婚女性を求む」というような書

き方になっています。ジェンダー論的に言えばプラス・マイナスがありますが、明治の『読賣新聞』は、女性の視点で記事を書きたいということも考えていて、この場合の「女性の視点」は「既婚女性の視線」という考え方で、結婚や出産の経験をいかして、報道してほしいという方針です。ですから、メディアの送り手側も、いわゆる男性視線にならないように意識していたということはありました。

実際に書かれている記事を見ますと、演劇史上著名な松井須磨子さんでも、文学史上よく知られる与謝野晶子さんでも、非常に所帯じみた生活をしていることを赤裸々に書いています。それを読んだとき、私の感想になってしまいましたが、決して男性視線とは感じませんでした。「こんなふうに生活しているんですよ」ということを飾り気なくリアルに報じている感じですので、書いたのが男性記者か女性記者かによって、内容が分かれるかどうかの判断は微妙なところです。

ただ、「東京の女」シリーズを書いた探訪記者(いまで言えばインタビュー記者)の松崎天民という人は、男性ではあるのですが、松崎さんご自身がいわゆる学歴エリートではなくて、いろいろな人生経験を積

んだなかで女性にインタビューして、記事を書いていらつしやいます。

明治期の記者は、新聞の黎明期の記者ですので、社会的ステータスはそれほど高くありませんでした。ところが、現在は高学歴の男性中心の職業になってしまっているのです、かえって男性エリート目線の記事が多くなってしまう部分がある。明治・大正期は、新聞記者という職業が、男性にとってエリート職とわれていなかった分だけ、女性や、社会的弱者に対する視線が、比較的自由なかなとも思いました。

女性記者の進出についてですが、初期の女性新聞記者としては磯村春子さんや竹中繁子さんという方が草分けです。竹中繁子さんについては、評伝も出ていますが、先ほど松浦先生からお話があったような幼稚園の先生のような経験もして、三七歳で『朝日新聞』の記者になっています。彼女はいわゆるシングルマザーで、北京で「(記事の表現をそのまま使うと)私生児」の託児所などのルポをしています。そういう記事には彼女のいろいろな人生経験がにじみ出ていると思います。

また、磯村春子さんは、三八歳で亡くなりますが、八人の子どもを育てて、政治家のインタビューに行くときも子連れで、庭で子どもを遊ばせている間にインタビューをしたそうです。インタビューされる大隈重信も、「この女性記者は、子どもを連れてきて、けしからん！」などと野暮なことは言わずに、普通に遊ばせています。ですから、いわゆる女性目線の記事は、意外に現在の新聞記事よりも入っているのではないかと思っております。

それから、「女工さんはどういう立場だったのか」「女中も重要な仕事だったと思うが、それは女性の職業と捉えていいのか」という質問もいただきましたので、一緒にお答えいたします。

当時の新聞の「女中部屋」というコラムに、「工場の景気がいいので、みんな女工さんになって、女中さんが払底していて、どこの家の女中さんも近頃レベルが下がったという評判があり、それで奥さんが困って、女工さんがいいと言っても、ろくなことは覚えないうし、お給金だって残らないんだから、真面目な女中奉公が一番身のためだと言いながら、懸命に女中さんを引きとめる」ということが書かれています。

先ほど松浦先生からお話がありましたように、ハウスキーピングが女性のメジャーな職業だったというのは日本の明治期も同じで、昭和にも女中職はまだ残っていたということが、『女中がいた昭和』(小泉和子編、二〇一二年)など女中に関する研究書に出てきます。ですから、女中職は、日本でも重要な女性職として位置づけることができると思います。

ただ、「明治の末になると、女性が働くことが恥ずかしいと感じてしまうようになったのかはなぜなのか。それは『女大学』などの影響があるのか」というご質問があったのですが、たしかに江戸時代の武家の女性についての戒めが影響を与えていると思います。先ほど余裕のある華族や裕福な家以外の妻の多くは働いていたと申しましたが、明治末から大正初めにかけて、日本の女性も「アイドル・ウーマン」

に憧れ、「家庭の天使であることこそが女性の天職なのだ」と思った女性たちがいました。なぜなら、それは階級上昇だったから。つまり、サムライ・モデルの、家で夫に尽くす奥様が、階級上昇に見えたからだと思います。

ただ、イギリスと同じように、非常に自覚的に「私たちは階級上昇しているのよ」と捉えるほど、「階級」という概念がはつきりあったかどうかは疑問ですが、実質、それを求めているのだと思います。

それと、松浦先生のお話を伺っておりまして、英日の違いとして非常におもしろいと思ったのですが、日本の場合、近代の女子教育は女性の労働参画を引っ込めるために機能したという側面があります。つまり、女子教育者たちの何人かは「私たちの女学校は良妻賢母を育てるための学校であって、女子が卒業後、職業に就くことは強く戒めます」というふうに明言しておられて、教育を受けることが、逆に女性の労働参画を意識的に低めた。この点は、イギリスとは大きく違う面かもしれないと思いました。

【南】 ありがとうございます。ご質問にお答えいただくなかで、いくつかの論点が出てまいりましたし、佐伯先生は最後に女子教育の功罪についてお話しになりました。「女性にも教育を」というのは非常にいい話ではありますが、日本における女子教育基本的に高等女学校などでは、良妻賢母教育の影響が圧倒的に強くて、それがむしろ女性の社会進出を妨げる方向に向かい、おそらく、それが明治前半の

「ハンサムウーマン」を消滅させる方向に向かったのではないかと、という指摘は非常に重要だと思います。

これにつきまして、松浦先生からお願いします。

【松浦】 日本の女子教育（いわゆる女学校・中等教育）が良妻賢母型の教育に傾いていたというご指摘は、とても鋭いと思いながら聴かせていただきました。イギリスの場合は、女子中等教育（初等教育後の教育）に関しては大きく分かれます。と言うよりも、イギリスの教育は女子に関わらず、日本と違って、複線型です。イギリスは現在も階級社会であると申しましたが、上流階級や上層中流階級の子どもたちは小学校になんか行きません。家で家庭教師に付いて学びます。小学校は庶民の子が行くところなんです。もしくはプレパトリウススクールといって、パブリックスクールに行く準備のための学校に通い、そして、パブリックスクールから大学に進むという感じです。庶民の子は、小学校に行き、昔ならそこで止まっていたのですが、いまは中学校に行き、そこで学業を終えるか、大学を目指すならば、奨学金を得て大学に進むという感じです。このように、階級によって、教育の受け方・学び方が全然違うというのは、いまでも相変わらずです。

女子の場合は、中等教育も二つに分かれています。伝統的なアイドル・ウーマンであるためには、よい夫をつかまなければいけないので、そのための学校が存在しました。すなわち社交界へ出て注目を浴びて、すてきな旦那様にめぐり合うための準備をする花嫁修業の学校ですね。このタイプの学校は、いまでも厳然としてあります。私がイギ

リスにいた頃、時の皇太子妃ダイアナが話題になりました。彼女はスペインサー伯爵家のお姫様で、彼女の受けた教育は典型的なアイドル・ウーマン向け教育で、一般人と同じ教育は受けていない。上流階級向けの教育を受けていて、最後はフィニッシング・スクール(社交界デビュー準備学校)であるスイスの女学校に行っています。

そういうコースもある一方で、一九世紀半ば、フェミニズムが発生して、女性の地位を向上させ、社会に進出させるための運動として、まず女子中等教育、それも学術的な知識教育を重んじる教育が展開され、最終的に大学が目指されました。その結果、この路線の女学校がいくつも誕生しました。カスリーン・ベタートンがいた女子パブリックスクールも含めて、女子で「パブリックスクール」と名乗っているところは、まず間違いなく学術型、つまりフェミニズムの薫陶を受けた女学校です。

カスリーンは、「行ってみたら、家庭科教育はまったく無視され、『あなたたちは、こんなものは習わなくてもいい。家庭科なんか習ったら、家庭に入ってしまうでしょう。女の子は、そんなこと習わなくていいの。ここに来る女の子は習わなくていいの』という感じで、家庭科教育がすぐおざなりになっていた。私はそれが不満だった。なぜなら、先生たちが圧倒的にフェミニズムの薫陶を受けた世代だから」というようなことを書き残しています。その意味では、イギリスにおいては、相変わらずアイドル・ウーマンを目指させる女子教育もある一方で、教育が女性を職へと押しやる場でもあったと言えるのではないかと思います。

一方、労働者階級の女子についても同じ側面が見られます。一八七〇年に国家による公教育が始まったことをうけ、初等教育を得て、そこで教員見習いになり、奨学金を得て教員になっていく女子が多数現れました。ロンドンの小学校の女性教員の四分の一は既婚で、結婚して教員を続けている女性でした。当然ながら、当時の社会は彼女たちに対して、「よい子を育ててほしいから、妻たる者、母たる者はそれに専念すべし」という圧力を強めます。でも、小学校の女性教員たちは、それはね返しています。その理由として、「世の中でまともと思われるような生活を維持するためには、私の収入は手離すことはできない」というようなことを言っています。

小学校の先生は中流階級職と捉えてもいいのですが、上層労働者階級と下層中流階級の娘たちが、就く仕事でした。彼女たちは、明らかに女性の労働を否定していません。就いている職が工場労働や女中とは違うからかもしれませんが、明らかに自分の職に誇りと専門性を認めている。だから生涯の職として選んでいる。そういうことがとても色濃く出てきています。

その一方で、そうであるがゆえに、家事・育児と学校の先生(当時の小学校は、たいていの場合、少し先生を続けたら女校長になりました)という二重の責任を背負うことによつて過労に陥り、病んだり、若くして亡くなってしまうこともありました。

ですから、イギリスの女子教育は、明治末以降の日本の良妻賢母主義教育とは少し意味合いが違いかもしれません。

【南】 ありがとうございます。非常に示唆的なお話でした。特に日本とヨーロッパの違いとか、やはりヨーロッパ社会では「階級」の持つ社会的意味合いが圧倒的に大きい。明治以降の日本の場合、もちろん戦前の日本はそれなりの階級社会だったと思いますが、ヨーロッパ的な意味での「階級社会」とは少し違う。おそらく、それが女子教育においても現れてくる。ある意味で、日本の場合、階級を超えるような発想があるのですが、それが逆に女子教育を画一的に良妻賢母型に押し込めてしまうのかな、という印象を受けました。それは、第二次世界大戦を経て、戦後になって、ずいぶん変わったはずなのですが、そういう発想はいまでも強いのかなと思いました。

階級の違いについては、もっと掘り下げて考えるべきところかもしれません。いわゆる良妻賢母イデオロギーが明治後期から大正にかけて強まっていくことについては、私もゼミで学生に卒論指導をしている関係で、そういうテーマで卒論を書きたいという学生がいますので、少し調べたことがあります。そういう研究はさまざまな方がされていますが、良妻賢母型教育について、佐伯先生からご意見があればお願いいたします。

【佐伯】 イギリスの複線型の教育というお話がたいへん興味深かったのですが、日本の女子教育にも二つのパターンがあったと思います。ひとつは、草創期の津田塾や官立の女子師範学校（現・お茶の水女子大学）など、一部の女子教育機関は、ポリシーとして教職のような専門職をめざす学校でしたし、現在、女子大として残っている明治発祥の

女子教育機関には、生涯キャリアをめざす方針を含む場合もあります。

日本で複線型があるとすれば、そういう生涯キャリアを目指すタイプの女子教育と、結婚退職するタイプの「良妻賢母」を目指す女子教育との複線なのですが、それは階級とは一致していない。日本型社会と言っているかどうかはわかりませんが、明治以降は、たとえ旧士族や華族でなくとも、男子は帝大を出れば、「末は博士か大臣か」と将来有望視され、激しい階級意識は少なくともイギリスほどではなくなっていますし、明治一〇―二〇年代くらいの小説では、「私は旧士族だ」という誇りが書かれていますが、結局、実質的には、「それがなんぼのもんだ」という状態になっています。

その意味では、男性にとつては、教育によって平等社会が誕生したということだったと思いますが、女性は、「階級上昇した帝大出の秀才に妻としてついていく」という人生モデルになつていき、そのときに帝大出の男性が求めたのが「一流女子大卒」という肩書だったりするわけです。ですから、日本近代の女子教育の主流は、賢い妻や母になるために教養を身につけた女性になることが目的で、決して専門職になるためではないし、男性をしのぐ収入を得てはいけませんが、育児のためには、教養を持つていなければいけないということで、高等教育を受けた女性たちが生産された。つまり、女性の側でも階級流動性を可能にするための女子教育ができていったように思います。

ただ、きょうは意識的に、新聞の非「良妻賢母」型の記事をご紹介します。

しましたが、当時の女性雑誌は家庭のビジュアルイメージをどんどん理想化していきますので、女性がそちらのほうに流れていきます。平塚らいてうなどが始めた雑誌『青鞥』は、歴史的には有名ですが、せいぜい五年くらいしか続かず、あだ花的に終わりました。ところが、長く続いているのは『婦人公論』であり、『婦女界』であり、「良妻賢母」に近いモデルの女性をターゲットにした女性雑誌のほうが寿命は長いし、そうした女性雑誌が提供している情報は、料理だったり、夏の装いだったり、夫にどんな洋服を着せたらいいのか、子どもにどんな教育を授けたらいいのか、といった内容が中心です。そうした家庭向きの情報を、とても高度なレベルで流していますので、そちらの影響力も大きかったかなと思います。

私がいとも不思議に思うのは、「家庭の外で仕事をしていない」良妻賢母」という短絡的な発想です。先ほどご紹介した磯村春子さんは、子連れで大隈重信邸にインタビューに行ったりしていますが、当事者である子どもはその状況を嫌がるどころか、楽しんでるんですね。

「私は母を誇りに思っています」というふうに息子さん自身が証言していますし、まったくグレしていません(笑)。なにより、「外で働く女性」は良妻賢母ではない」という話を通るならば、農家の子どもは全員グレなければいけないことになります。

考えてみればおかしい話なのですが、「物理的に家庭にいないこと＝良妻賢母」という単純な図式がこれほどまでに通用してしまったことの不思議を、いまあらためて考えなければいけないのかなと思います。

【南】 いま、また重要なご指摘をいただきまして、日本の女子教育も、決してすべてが良妻賢母型ではなく、生涯キャリア型の学校もあったというお話でした。いささか手前味噌ではありますが、私どもの京都橘大学のいちばんの出発点は「女子手藝学校」でした。つまり、生涯キャリア型の学校として始まるという名誉ある歴史を持っておりますので、いまのお話を聴いて、少し誇らしく思いました。

もうひとつは、いわゆる女性雑誌の果たした役割です。これは非常に鋭いご指摘であると同時に、これからの研究課題として捉えなければいけない問題かなと思いました。女性雑誌を分析した研究は本当にたくさんありますので、ひとくちに「良妻賢母」型と言いつても、いろいろな新しい傾向などがあります。おそらく欧米の論調などを取り入れて、当時としてはフェミニズム的な発想も少し入れながらも、全体としては「女性は家庭に入るべき」という風潮が一般的だったとも考えられるかなと思います。

また、近代社会になる前の江戸時代の日本と近世のイギリスとの違いについて、もうひとつ考えなければいけないのかなと思いましたのは、社会全体の婚姻率の違いです。というのは、一七―一八世紀、近世のイングランドは独身率が非常に高く、平均初婚年齢もほとんど現在と変わらないぐらいです。これを人口史では「北西ヨーロッパ型」人口構造と言いますが、それに比べますと、おそらく日本の江戸時代は婚姻率がずいぶん高いのではないかと。あるいは、農業社会のあり方や家族構造のあり方などが違うのではないかと。ひょっとしたら、そういうことも考えなければいけないのかなと思いました。これは今後の

課題としなければいけないと思います。

私が出しやばりすぎたせいで、もう閉会の時間が迫ってまいりました。申し訳ありませんが、最後にひとことずつお話ししていただければと思います。

【佐伯】 なぜ日本の女性は、家庭の外で働かないモデルを明治以降に選択するようになったのかと考えますと、明治の女性たちのモデルというと、昭憲皇太后や閑院宮妃、鍋島栄子など、皇族・華族の女性を理想化して、女性雑誌で図版入りで出したんですね。そうすると、彼女たちは生計のための生産労働をしませんから、メディアによる「セレブ妻」への憧れの刷り込みが、大変大きかったと思います。

一方で、現在のイギリス王室と日本の皇室は、よく乱暴に比較されてしまうのですが、実態は全然違っていて、日本の皇族はジュアル的にすごく理想化されるとともに、神格化もされ、同時に家庭化されていきます。たとえば、「家庭で夫を支える妃殿下」というふうに、あくまで虚構としての「家庭」イメージなのですが、「閑院宮妃が閑院宮を家からお送りし、お子さま方をお世話して：」といったライフスタイルが、理想化されたりするわけです。実際には、奉公されている方がたくさんおられて、一般市民の家庭とは違うはずなのに、「閑院宮妃も良妻賢母的な生活を送っていらつしやいます。お子さま方のお世話をこのように熱心になさっています。閑院宮をお送りし、またお迎えし：」という感じなんです。家庭生活の実態はかなり違うは

ずなのに、なぜか理想の家庭像として一般市民に対してもモデル化されてしまうところも大きいと思います。

もちろん、イギリスの新聞や雑誌メディアにも、ダイアナ妃やキャサリン妃など、王室の女性たちがたくさん登場すると思いますので、そこは表面的には似ているのですが、たぶん、その影響力も違うのではないかと思ったりしました。

十分なまとめになっていませんが、ありがとうございました。

【松浦】 皇室がひとつのローリングモデルだということであれば、たしかにヴィクトリア女王とその父君のアルバート公はモデルではありません。でも、典型的に中流階級以上にとつてのモデルなんです。中流階級がヴィクトリア女王夫妻を真似ようとした」と、よく言われます。でも、それは人口の二〇％強の人たちにとつてはモデルになります。八〇％ぐらいの人にとつてはまったく無関係な存在です。

先ほど、イギリスは階級社会だと言いましたが、その例でいくと、教育もまったく違いますし、文化が違うので、読むべき新聞も全然違う、ということがよく言われます。『ザ・タイムズ』はクオリティペーパーで、クオリティペーパーを日本で探すとすれば、それこそ『朝日新聞』や『読売新聞』がそれに相当するというふうに紹介されますが、『ザ・タイムズ』に今回のような紹介記事は載りません。

『ザ・タイムズ』は、文章表現がものすごく難しく、英語のレベルが全然違いますから、読める階層は一定の層に限られます。中流階級が好んで読む新聞は、『デイリー・エクスプレス』など、また別にあ

ります。そして、労働者階級が読む新聞も、別に厳然としてあって、『マンチェスター・ガーディアン』が労働者階級のクオリティペーパーと見なされるように、明らかに階級ごとに読まれる新聞が違う。それはいまもなかなか崩れないでいる。そうすると当然、そこで書かれる記事内容は違ってきます。階級の経済的利害がそのままストレートに出てくるような感じになるので、労働者階級向けの新聞や雑誌は当然、そうなります。

イギリス史の人間は「階級」を当たり前のものとして考えてしまうので、今回、佐伯先生と一緒させていただくことで、イギリスが階級社会であること、そういう近代社会がいまだに続いていることのイギリス史における意味を、もう一度、一から考え直してみなければいけないと思いました。

きょうの話で私が申し上げたいのは、いわゆる新中間層（ホワイト・カラー、ホワイト・ブラス職従事者）が出てくることで、労働者階級の上の部分と中流階級の下層部分との間が融合していったようにも思うのですが、そのことが次の時代にどういう意味を持ったのかはまだ見えてきていませんので、そういうことをこれからの課題にさせていただきますと思います。

【南】 ありがとうございます。いろいろな論点がまだまだ出てまいります、もう時間になりましたので、このあたりで終了したいと思います。

最後に少しだけ宣伝をさせていただきますと、女性歴史文化研究所

が出版いたしました『医療の社会史―生・老・病・死』と『表象のトランス・ジェンダー―越境する性』は、それぞれ歴史系と文学系になつています。私どもが編集している一般向けの『クロノス』という小雑誌も含めて、受付のところで展示しておりますので、ご興味のある方はちょっとごらんいただければと思います。

きょうは、ご講演とパネルディスカッションということで長時間、貴重なご意見をありがとうございました。いま一度、先生方に大きな拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、本日のプログラムはすべて終了いたしました。長時間、本当にありがとうございました。